〈研究ノート〉

〈茅〉について
——その呪術的効用をめぐって

大形　徹

はじめに

宮崎県の米良には端午の節句の時期にシメナワに茅（カヤ）とヨモギを結わえ、屋根にかざる風習がある（図1）。同様の風習は大阪や奈良あたりにもみえる。中国の西南の少数民族にも似たようなシメナワがある。こういったシメナワの起源は『続漢書』「礼儀志」の注にひく鬼門の門番が手にする葦茭かもしれない。これは鬼門を出入りする悪鬼をしばりあげるものである（図2）。

また端午や夏至にチマキを食べる。粽（チマキ＝茅巻）は、茅（チ＝チガヤ）で巻いたから、この名があるとされている。現在、実際に使われているものは茅ではないが、茅という植物と無関係ではない。粽の起源に関しては中国では屈原の説話と結びつけて考察される事が多い。しかし日本の話では、とくに屈原と結びつく事がない。祇園祭のかざりチマキは門口にぶら下げられる。これは蘇民将来の伝説と結びつけられているが、中国の草包と似ている。本来、正月のシメナワと同様の悪霊除けであったように思われる。

「茅（ち）の輪くぐり」・「茅（カヤ）葺き（カヤ＝ススキ）の屋根」なども「茅」という漢字が使われている。大漢和辞典では「茅」を「かや・ちがや」と訓んでいる。漢字は必ずしも厳密な植物学的分類には一致せず、カヤ（＝ススキ）とチガヤはしばしば混同されている。中国においても、明の『本草綱目』は「茅（チガヤ）」と「芒（ススキ）」を区別するが、本当に明確に区分されていたかは疑問である。拙稿はチガヤとススキを厳密に区別することを企図したものではない。ここでは茅という漢字あるいはカヤ・チガヤという名称のもとで説明されるさまざまな事例について考察する。

「茅（チガヤ・カヤ）」は現在ではたんなる雑草とみなされているが、古代においては有用な植物であった。中国古代の文献に

も頻繁にあらわれる。その使用法を調べてみるとたんに実用の面からだけでは説明できないことも多い。

そこには、この世界は人と鬼（＝死者の霊）からなりたっており、人は時に鬼の害悪をこうむるという、古代の人々の世界観が反映している。「茅」は鬼の害悪をふせぐ呪術的植物とよべる。菖蒲は剣の形をしているから悪霊除けになるとされるが、「茅」も葉が矛の形をすることにもとづくとされる。またカヤの葉は刃物のようによく切れる。

チガヤ・カヤは少数民族の居住地域から中国をへて日本へと伸びる、いわゆる照葉樹林帯に重なる植物といえる。以下、「茅」をめぐるさまざまな問題について考察したい。

一、茅と芒

漢和辞典の説明

「茅」という漢字は、『新字源』[1]では、

①かや。ちがや・すげ・すすきなどの総称。
②かやを刈る。かやかり。
③かやぶき。かやでふいた屋根。また、その家。
④ち。ちがや。山野に自生するすすきに似た草。

と説明されている。

『大漢和辞典』[2]でも、「茅」は「①かや。ちがや。ち。…」と

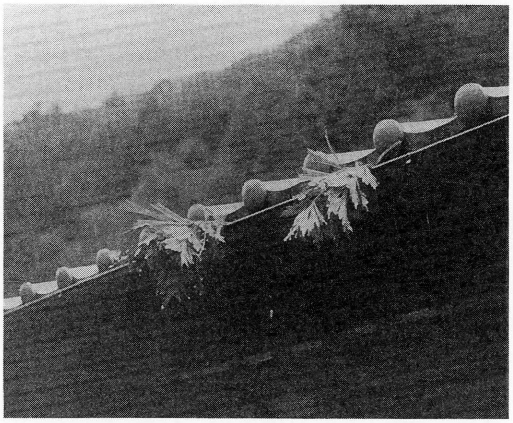


図1　カヤ（ススキ）。「五月五日の節句の時にはフツ（ヨモギ）とカヤの大きいとを切ってきて、カヤ二本とフツ一本の三本をあわせてカヤの葉っぱでしばって、それをカヤの屋根の軒にさしこみおった。クリの木を割って屋根をふいたソギ屋根にはぬからんから、屋根の上にほうりなげおったですよ」。椎葉クニ子『おばあさんの植物図鑑』、葦書房、1995年、148頁。

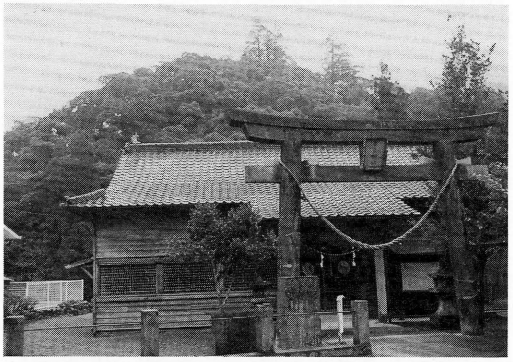


図2　宮崎県西米良村米良神社のシメナワ。元禄一六年五月七日に洪水で流失後の再建。96.10.30筆者撮影。

図3　ススキとチガヤ。熊本県湯前付近のアゼ。ススキ（芒）とチガヤ（茅）は隣接して生えていることが多い。葉の真ん中に白い筋のあるのがススキ、ないのがチガヤ。96.10.31筆者撮影。

説明される。

「ちがや」と「すすき」とは、植物学においては、ともにイネ科ではあるが異なった植物である（図3）。しかし漢字では、ともに「茅」が使われている。また日本語でいう「ちがや」の名称はおそらく「かや」から派生したものであろう。これは形状がよく似ているところからの命名と思われる。

植物辞典の説明

『日本 中国 植物名比較対照辞典』[3]によれば、チガヤは、

Imperata cylindrica (*L.*) *Beauv.*

日チガヤ【千茅】、茅または白茅を用いたことあり。㊙根茎：利尿、止血、清涼剤。花：止血、止痛。

中白茅 Bai mao［全国各地］

である。ほかに、

Heteropogon contortus (*L.*) *Beauv.*

日アカヒゲガヤ【赤鬚茅】、㊙根または全草：止渇、舒筋。

中黄茅 Huang mao, 地筋 Di jin［華中、華南、西南、浙江、陝西］

Hierochloe odorata (*L.*) *Beauv*; *Hierochloe bungeana Trin.*

日コウボウ【香茅】……

中茅香 Mao Xiang

がある。

さらに茅（カヤ）のつく植物としては、コシノネズミガヤ、ネズミガヤ、ヒロハノハネガヤ、イタチガヤ、キツネガヤ、ホガエリガヤ、ホッスガヤ、カモガヤ、ヒロハヌマガヤ、ハマガヤ、イトスズメガヤ、スズメガヤ、シナダレスズメガヤ、コスズメガヤ、ナギナタガヤなどがある。

一方、カヤ（ススキ）は、

Miscanthus siensis Anderss.

日ススキ【薄】……

中芒 Mang［南、北の各省区］

とされている。

『原色牧野植物大圖鑑』[4]ススキでは「日本各地、および南千島、朝鮮、中国の温帯から暖帯に分布」とされ、チガヤと比べて北よりに分布している。当然のことながら、チガヤとススキは明確に区別されている。

しかし、文献にみえる「茅」あるいは日本語の「かや」は、ともにしばしば混同されており、それが「ちがや」なのか「すすき」なのか厳密に区別しがたい場合も多い。

「かや」の名称について

「カヤは刈って屋根を葺く草からきている」[5]。刈（か）ると屋（や）根から、かやだとされる。「刈屋（かりや）の約」[6]もこれに近い。ほかに「上屋（かや）の意」[7]ともされる。「カヤ（茅）は、刈って屋根をふくことからつけられたらしく地名（茅場にちなむ）が残る」[8]と、茅場の「茅（かや）」はチガヤではなくススキをさす。実際、茅葺き屋根はチ

ガヤではなくススキがもちいられている。

図4　マカヤ（チガヤ）『おばあさんの植物図鑑』8頁。

「チガヤ」の名称について

一方、ちがやは「たくさん生えるので千茅（ちがや）、若芽が赤いので血茅、味が乳に似ているため乳茅（ちがや）などの諸説がある[9]」とされる。いずれにしても「ち（千・血・乳）」なる「かや（ススキ）」ということで本来「かや（ススキ）」があり、それと区別するために「ちがや」とよばれたように思われる。

しかし、宮崎県椎葉村の『おばあさんの植物図鑑[10]』「マカヤ（チガヤ）」は次のように紹介する。

図5　チガヤ　平凡社『世界大百科事典』17巻―593頁。

図6　白茅（チガヤ）　明、李時珍『本草綱目』附図。

宮崎県の方言で言うカヤとマカヤは似たような名前だが、種類が違う。

「十五夜にもあぐれば、端午の節句のときにフツといっしょに束ねて、軒にさしおったのがススキで、これが生のときをカヤという」

そして今回紹介するのがマカヤことチガヤである。県内ではこれのつぼみをツバナと呼び、子供の遊びに使われた。

「マカヤは食べられるとですよ。まずマカヤの根ばり。子供のころ、冬から春先に掘って食べおった。あれが甘くておいしくてね」

これは県内一円にいえることで、俗にアマネとよばれて

図8　芒（ススキ）　明、李時珍『本草綱目』附図。

図7　地筋菅茅　明、李時珍『本草綱目』附図。

いる。

「そうすっと今度は春、つぼみがふくらんできたころ、こっちじゃカヤがはろうたとか、はらみガヤとか言うですもんね。あれが穂がまたおいしくて」

……

つまり、ススキは①ススキ（枯れたもの）、②カヤ（生のススキ）にわかれ、チガヤはマカヤと呼ばれる。

しかし「カヤがはろうた」とか、「はらみガヤ」とか呼ばれる際のカヤはススキではなく、チガヤである。

カヤとマカヤは区別されてはいるのだが、マカヤ（チガヤ）を省略してカヤということもある。これをみるとたしかに名称は混乱している。しかし、実際に植物を利用していた人たちにとっては、そう呼ぶことに何の支障も混乱もなかったようにも思われる（図4～図8）。

二、宗教的行事と茅

ここで中国の文献にみえる宗教的なものにかかわる「茅」について考察したい。

茅社

天子の大社は、五色の土を以て壇を為り、皇子封じて王と為す者は、之れに大社の土を授くるに、封ずる所の方色を以てし、苴むに白茅を以てす。之れを国に帰らせ以て社を立たしめ、之れを茅社と謂う。（後漢、蔡邕『独断』）

とある。

古、天子が皇子を封じて王とする時に、大社から封ずる所の方色の土（五行思想によれば東が青、西は白、南は赤、北は玄［黒］、中央は天子で黄）を割き、白茅に包んで与え、国に帰って分社を建てさせた。

「社」という漢字は「土をまつる」という構造をとる。「土☉」は土を丸めた地主神の形である。[11] 土はたんなる土ではない。本来、土地の神が宿るものである。それを白茅につつむのは、茅に悪霊を禦ぐ力があるからで、大切な土に邪気や邪霊が入りこむことを恐れたからであろう。

『書経』禹貢「厥貢惟土五色、伝」は同様の文をのせ、そのあと「苴むに白茅を以てす。茅は其の絜（＝潔）を取る」と説明する。白茅は社の行事に必要なものであり、土をつつむものであった。なお茅社と同様の意味で「茅土」ということばも使用される。

茅旌

『公羊伝』、宣公一二年に「鄭伯肉袒し、左に茅旌を執り、右に鸞刀を執り、以て楚子を逆う」とある。茅（かや？）を旌としたもの。祭祀にこれをとって神を導くに用いる。

注は「茅旌は、宗廟を祀るに用うる所、迎えて神を道びき、祭りを護る者を指す。断つを藉と曰い、断たざるを旌と曰う。

茅を用うるは、其の心理、一に順い、本自りして末に暢ぶるに取る。精誠を通じ、至意に副う所以なり」という。儒教の注釈は「精誠を通じる」等と倫理的な意味あいで解釈する。しかし茅の他の用例と比べると、神を導く時に茅の旗で神を悪霊から護るという辟邪ではないかと思われる。

『五十二病方』にも茅がみえる。

231ヘルニアの治療［別方］に、

細かく砕いた菌［桂］を一尺、独□を一升、いっしょにして細かく砕いて竹筒の中に盛り、筒にいっぱいにして□□□□□□□□□□□□□□□□、すぐに布で覆って、それを陰嚢の垂れ下がった部分の下側に、二ヵ所につけ、すぐに道其□□□□□□□□□□□□□□之。吹くひとはかならずその身を慎み、その身が落着くのを待ち、□□□□□□□□□□□□□□□□、脱腸がおさまったら、うやうやしく豚を犠牲に供え、おのれを不仁であるとして、以白□□□□□□□□□□□□□□□□茅を司命神を祀る場所に吊るし、かつ感謝の祈禱をおこなって、以為／□[12]。

ここは旗とはされないが、司命神を祀る場所に茅をつるす。

茅蕝

朝会の儀に使う「かや」で作った座席のしるしとされる。

『国語』晋語に、

昔、成王諸侯に岐陽に盟う。楚は荆蛮為りて、茅蕝を置く。

とみえる。

茅蕝は南方の楚の礼儀の習慣であったようだ。『国語』の記事は周初の成王の時の事とする。楚のような野蛮な国だから茅蕝といった野暮ったいものを使ったという意識だろう。ただこの話が本当に当時のものかどうかは疑問である。

韋昭の注は、

置くは立つるなり。蕝は茅を束ねて之れを立つるを謂う。酒を縮む所以なり。

茅柴は酒をしぼるのに用いられたが、ここはその意味とは少し異なる。「酒を縮む」は酒をこすことだが、ここでは「したたらせる」ことである。地の神への供物だろう。

『史記』叔孫通伝『史記索隠』所引の賈逵の説は「茅を束ねて以て位を表すを蕝と為す」と、儀式の際の席次をあらわす標識として用いたと解釈する。この場合もたんに標識だけでなく、茅のもつ悪霊よけの効果を利用したものだろう。

蕭茅

『周礼』天官・甸師に「祭祀。蕭茅を共う」とある。

鄭注に、

鄭大夫云う、蕭の字或いは茜と為す。茜読みて縮と為す。茅を束ねて之れを祭前に立て、酒を其の上に沃ぐ。酒滲みて下り去ること、神之れを飲むが若し。故に之れを縮と謂

う。縮とは浚なり。

と解説される。茅を束ねたものに酒をそそぐと酒がしみ込んで下（地中）に流れるので地の神が飲んでいるようにみえるという。ここでも茅は神をまつる儀式に使われている。この場合も神にささげる大切な酒を汚されない為に悪霊よけの茅を用いたとみなせる。

白茅

白茅は『詩経』にみえる。「野に死麕有り、白茅もて之れを包む。女有り春を懐い、吉士之れを誘う。林に樸樕（小木のこと）有り。野に死鹿有り、白茅もて純束む。女あり玉の如し（召南、野有死麕）」とみえる。毛亨の注釈は「白茅は潔清に取るなり」という。鄭玄の注釈は「乱世の民貧しくして、彊暴の男、多く行い礼無し。故に貞女の情、人をして白茅を以て野中に田する者の分かつ所の肉を裹み束ね、以て礼と為して来たらしめんと欲す」と述べる。詩の内容には把握しがたいところもあるが、白茅で麕や鹿の肉を包むことが礼にかなった事とされている。白茅で包むのは、邪気や邪霊が入りこむことを防ぐためであろう。

雲夢秦簡『日書』には白茅で枯骨をつつむことが記される。

……而ち人に非ざるなり。必ず枯骨なり。旦にして之れを最（撮）め、苞むに白茅を以てし、果（裹）みて以て賁（奔、濆では？　濆だと「濆き」）り、而して之れを遠去すれば則ち止む。[13]

ここは枯骨という骨が関与する。これは鬼（悪霊）と関わる。鬼が出現するときは近くに鬼の骨が残されていることがある。鬼（霊魂）はその骨に依りついているのだろう。『荘子』至楽篇の髑髏と荘子の問答にも、その影響が見られる。至楽篇の釈文には「髑髏、枯骨也」と記されている。[14]

茅社などの場合は悪霊が入り込まないように白茅で包んだ。ここで枯骨（悪霊）を包むのは悪霊が出られないように封じ込めてしまうということであろう。

こういった包むという考え方は、後に考察する粽のなかに継承されていくと思われる。

『史記』封禅書に白茅の上に立つという話がみえる。

使いをして羽衣を衣、白茅上に立たしむ。五利将軍も亦た羽衣して夜、白茅上に立つ。

とある。

ここは五利将軍（方士の欒大）が、漢の武帝のために、神仙を招く儀式を行った際の話である。方士の欒大は棊（双六・将棋のたぐいのコマ）を勝手に闘わせるといった簡単な方術で武帝の信任をえた。しかし、のちには武帝を欺いていたことが露見して誅殺された人物である。ここの神仙を招くといった儀式も古来より伝わるものではないだろう。

白茅について『史記正義』は、「潔白の徳有るを喩う」と「白」の意味を強調する。白茅にそういった意味が無いとはい

えない。しかし、欒大が白茅を使ったのは、それらしくみせかけるためであろう。このことは白茅がそれだけ神事に多用されていたことを示しているように思われる。ここは白茅を下にひく。地下からの悪霊を避けるためであろう。

『抱朴子』登渉篇には、鬼に白茅や葦の杖を投げるとすぐに死んでしまう、と述べられる。ここも明らかに悪霊よけとして白茅が使われている。

茅葅・神藉

茅を束ねて五寸に切り、祭前に用いた敷物である。『周礼』地官、郷師に「大祭祀には牛牲を羞む。茅葅を共う」とみえる。『易』にも「藉に白茅を用う」とある。

『史記』「封禅書（孝武本紀・『漢書』郊祀志も同文）」に、「江淮の間、一茅三脊を神藉と為す」と、一本の茅が三つに枝分かれしたものを神藉とした話をしるす。

『集解』は孟康の説をひき、「所謂、霊茅なり。藉は薦なり。以て地に藉くなり」とのべる。薦は荐である。ここは茅を編んでムシロにしたのだろう。

「封禅書」につけられた『正義』は、苞茅山（いわゆる茅山）に産する苞茅で、刺有りて三脊とされている。トゲのあるものを敷物にするのは、一見、ふさわしくないように思われる。しかし、ここはむしろ地中からの悪霊をそのトゲで撃退するためとみるべきであろう。

三脊は服虔が「茅草に三脊有り（『漢書』郊祀志注）」とのべるように、三本に枝分かれした茅のことである。この話は唐代に作られた『管子』の封禅第五十[15]にそのまま採録された。

それが宋代にまで影響を与え、大中祥符元年（一〇〇八年）に岳州が「三脊茅」を献上している（『宋史』真宗紀）。宋、劉敞は仁宗の慶暦六年（一〇四六年）の進士だが、「三脊茅記」をあらわして次のように述べた。

三脊の茅は、江淮の間に出づ。皆な楚・越の国なり。王者有れば則ち後ち服し、王者無ければ則ち先ず叛く。故に封禅は、必ず三脊の茅を以てす。其の意、以為えらく、能く楚・越を服さば則ち三脊の茅、致す可くして、封禅すること乃ち宜し。

真宗の時代に天書が下ったとして封禅を行った。ここは封禅と三脊茅を儒教的な王道論をもって理論的に結びつけようとしたものである。付会であることはいうまでもない。

芝は『説文』に𠦪につくる。画像石[16]にも三本に枝分かれした芝草の図がある。三脊と何らかの関連があるかもしれない。

芻狗・芻霊

『老子』第五章には、「天地は仁ならず、万物を以て芻狗と為す。聖人は仁ならず、百姓を以て芻狗と為す」と芻狗のことがみえる。王弼の注釈は「獣が食べる芻、人が食べる狗」、河上公注も「芻草狗畜」といった解釈を示す。

しかし、それらの解釈はあまり用いられていない。ここはふつう「芻でつくった狗」と理解されている。それはこのあと紹介する『荘子』の話にもとづいている。「芻の狗」は祭りがおわったあとは無用のものとして棄てられてしまう。『老子』は、天地や聖人が万物や人々を無情に扱う、というたとえとして「芻の狗」を出しているようだ。

『荘子』天運篇は、芻狗がまつられる前は、きれいな箱に盛られ、うつくしいきぬでかざられ、尸祝は斎戒して神にささげるが、祭りがおわったあとは、道行くものに踏みつけにされ、はては焚きつけに使われたりする、という話を紹介する。

『経典釈文』荘子音義にひく晋、李頤の説は「芻を結びて狗と為し、巫祝、之れを用う」というものである。

『老子』第五章や『荘子』天運篇の「芻狗」は、ふつう「わらの狗」と解釈されている。しかし、これもまた本来、「茅」であった可能性がある。

唐、成玄英の注釈は「芻狗は草なり。草を結んで狗を為り、以て解除するなり」とする。ここでは「芻」は「草」である。

『礼記』檀弓下には「芻霊」のことがみえる。

塗車・芻霊、古自り之れ有り。明器なり。

明器は死者の用いる器物である。注には「芻霊は茅を束ねて人馬を為る。之れを霊と謂うは神の類なればなり」とみえる。ここの「芻」はいわゆるワラではなく「茅」をもちいる。成玄英は『荘子』の芻狗を「解除（邪気や邪鬼をはらいのぞく）」のためと理解した。芻霊に「茅」がもちいられることも、神や悪霊との関わりにおいて理解すべきものなのだろう。[17]

なおワラと読む語は多数あるが、そのうち稈・稾・藁は、稲あるいは穀物のワラであろう。稈は『説文』に「禾茎」とされ、『広雅』に「稲穰之れを稈と謂う」とみえる。稾・藁もまた『説文』に「禾稈なり」とされている。

しかし「芻」は稲ワラ・麦ワラの類ではない。「芻」は『説文』に「刈艸なり。艸を包み束ぬるの形に象る」とされ、本来、刈りとって束ねた草である。

そうすると「芻狗」を「わらの狗」とすることは、誤りとはいえないまでも、その理解に多少のズレが生じているのではないか。後世、稲ワラ等で代用されることはあったかもしれないが、本来はチガヤであったのだろう。芻狗は「チガヤの狗」とする方が適当ではないかと思われる。

茅狗・茅龍

実際に茅を使った狗の話がある。『列仙伝』[18]巻下、呼子仙の話をあげてみよう。

呼子仙は漢中の関所のもとに住む占い師で百余歳の長寿であった。昇仙しようとするときに酒家の老嫗をさそった。夜、仙人が二ひきの茅の狗をもち、むかえにきたが、これにまたがると龍となった、という話である。

『列仙伝』につけられている讃[19]にも、「茅狗に駕るに方り、蜿

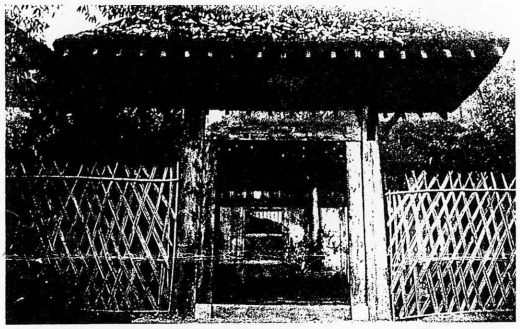


図9　河南省南陽市諸葛廬（後人重建）。「三顧臣於草廬之中（諸葛孔明、出師表）」で著名な草廬を復元したもの。中国民間美術全集(3)起居編、民居巻、華一書局、1993年、193頁。中国の文献には茅屋は数多くみえるが、現在、漢民族の居住区域でそれが残されているところはほとんどないようだ。

図10　雲南徳宏県、徳昂族住房。前掲、中国民間美術全集(3) 302頁。「茅草作屋頂」とされるが、正確な植物名は不明。少数民族地域には草葺きの屋根が多い。

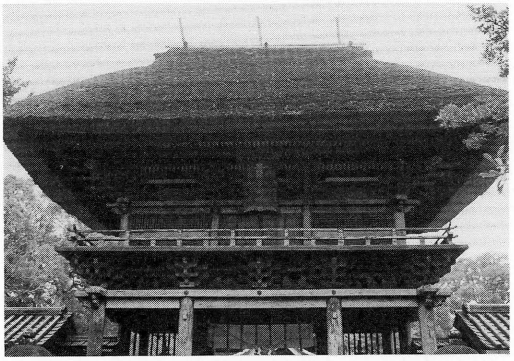


図11　青井阿蘇神社（熊本県人吉）の門。大同元年（806年）築。カヤ葺きのため、鬼瓦はないが屋根の下に石膏の鬼面が八面あり、八方に向いている。これによって邪気や邪鬼をはらうのであろう。神社は神を祀るところだが、そこに悪霊が入り込むことをおそれた。そのため魔除けにかかわるものが多い。門の下にはシメナワと弓矢をもった武士像（木製）・狛犬（木製）があり、辟邪の意味をもつ。

爾として龍逝す」とあり、茅狗が龍となってとびさったとしるす。後世、李白の「西岳雲台歌送丹丘子」には、「二茅龍に騎り天に上りて飛ばん」と、茅狗ではなく茅龍とされている。

ここでは茅の狗が龍となったとされている。神事に用いる茅が、昇仙ともかかわるとされるのである。

以上、「茅」は宗教的な儀式に多用されている。未開から文明に進む段階で儀式に用いられたものは身の回りにある動植物である。ありふれた植物、「茅」はどこでも手に入り、実用面からみても丈夫で使用しやすいものであった。時代が移り、他の物で代用できるようになった後も長くそのものが使われるのは、そこに実用以外の意味が付されているからであろう。古代の人々は真摯な信仰心によって神に対した。その際、害悪をくわえる邪気・邪霊の類に対しても真摯に向かい合わざるをえなかった。「辟邪」や「祓え」は邪霊を取り除き清めることである。その際、頻繁に用いられたのが茅・白茅であった。

三、茅葺き屋根

茅屋

『左伝』桓公二年に「清廟茅屋、大路越席」とあり、注には「茅を以て屋を飾る。倹を著す」と説明される。倹約の為に清廟に茅を使うという。その解釈は正しいのだろうか。

日本の神社にも茅葺きのものが多数ある。古いものほど茅葺きで、伊勢神宮は茅葺きである。それが茅葺き↓檜皮葺き↓瓦葺きへとうつっていく。現在では茅葺きが維持できず、銅板葺きになっているものも多い。

熊本県、人吉、青井阿蘇神社も茅葺きである。この茅葺き屋根の下に漆喰でつくられた鬼面が八面置かれている。鬼面は鬼瓦と同様に外部から侵入する邪気・邪鬼を追いはらう役割を果たしている。中国の寺廟にある鬼龍子も同様の働きをしているが、屋根をふく材料の茅にも辟邪の観念があったのではないか。

茅茨

茅だけでなく茨(いばら)でも屋根を葺いた。『穀梁伝』文公三年、『韓非子』説林上、『墨子』三弁などにみえる。『墨子間詁』は「兪云う、茅茨土階、是れ古の明堂の倹を言う」とする。明堂は周代、天子が政教を行い、諸侯を朝見した殿堂であり、茅や茨の屋根と土の階段は倹約を示すためだとする。

しかし、わざわざトゲのあるイバラや手の切れるカヤ（ススキ）を使うのは、それによって屋根から悪霊の侵入をふせぐという意味をもっているのだろう。屋根をふく茅は日本ではススキであるが、与那国ではチガヤを使っていたとされる。中国は白茅ともされるが、実際にチガヤが使われていたのかは不明である。現在では一般に「茅草(マオツァオ)」と呼ばれている。

白蓋

『爾雅』釈器には「白蓋之れを苫と謂う」とある。注には「白茅の苫なり」とある。また「義疏」は「李巡曰く、菅茅を編みて以て屋を覆うを苫と曰う」という。菅(スゲ)や茅（ここでは白茅）を編んで屋根をふくことを苫という。日本でも苫屋(とまや)という。

『新方言』釈器は「凡そ蓋を張るを皆な苫と釈するを得。止(た)だ茅を編みて屋を覆うのみに非ず。今人の華蓋・雨蓋皆な之れを苫と謂う」とある。茅を編んで屋根を葺くだけではなく、今の日傘や雨傘も苫というとされる。日本も同様である。屋根は家をおおい護るもので傘は頭をおおい守るものと考えれば、実用だけではなく辟邪の意味もこめられているのだろう。実際、後世の八宝吉祥のうちの宝傘（雨傘）と白蓋（日傘）には元来、辟邪の意味が含まれていたようである。

なお蓬[20]も、蓬宇（よもぎでふいたやね）・蓬屋（草屋根の家）・蓬戸（蓬を編んでつくった戸・貧者の家）等がある。屋根をふくものだが、これも貧窮の象徴とされる。しかし『礼記』「内則」に「射人、桑弧・蓬矢六を以て、天地四方を射る」等と、蓬の矢は魔除けである。また蓬餌は『西京雑記』三に「九月九日、茱萸・蓬餌を佩び、菊花酒を飲まば、人をして長寿ならしむ」とされている。

日本でも「五月五日の節句の時にはフツ（ヨモギ）とカヤの大きいとを切ってきて、カヤ二本とフツ一本の三本をあわせてカヤの葉っぱでしばって、それをカヤ屋根の軒にさしこみお

った[21]」とみえる。

フツ（ヨモギ）は艾[22]（ヨモギ）と書かれるべきで、中国の「蓬（ヤナギヨモギ）」とは同じではない。けれどもヨモギは「蓬」と書かれることも多い。その際、やはり魔除けとされている。蓬屋・蓬宇は、粗末な家や屋根というだけではなく辟邪の意味をも含んでいる。

茅椒

茅と椒（花椒・山椒）は、ともに家をつくる材料とされる。『唐書』武攸緒伝に「冬は茅椒を蔽い、夏は石室に居る」とみえる。また『資治通鑑』唐紀に「武則天、通天元年、冬は茅椒に居る」とある。注は「茅椒、之れを編みて室と為す。性暖、以て寒を禦ぐ可し」と説明する。

『資治通鑑』の注は「暖かいから」という。夏に石室に居るのも涼しいからであろう。

椒を塗り込んだものには椒塗・椒房・椒泥など多数ある。『漢官儀』には「皇后、椒房と称す。……温暖にして悪気を除くに取るなり」とされる。椒には、部屋を暖くするという効果以外に香りによる悪霊よけの意味もあるのだろう。椒を入れた酒の「椒柏酒（『荆楚歳時記』）」は百疾をのぞくとされる。疾病は本来、悪鬼や邪気が体内に入り込んでおこるとされた。ここは山椒によってそれを体内から追いはらい病をなおすのだろう。

茅と椒を用いるのは暖かいという実用面だけでなく、辟邪の意味も含まれていると思われる。

茅は敷物にすれば地中からの悪霊を防いだようだ。壁や屋根に使用することは外部から侵入する悪霊を禦ぐものであろう。

四、茅の輪くぐり

旧六月晦日の祭は、夏越祭で大隅の中部ではナゴッサアと親しみ呼ばれて、盛んに行われる。神社の御輿を海辺に運んで潮に少々つけ、その後、浜辺で茅の輪をくぐる行事がある。[23]

『備後国風土記』の逸文に、蘇民将来と巨旦将来という兄弟の話があり、武塔神が蘇民とその家族の腰に茅の輪をつけさせ、病よけの呪具とすることを教えた。茅の輪はチガヤをたばねて輪にしたもので、スガヌキともいう。六月晦の夏越（なごし）の祭りに人々にくぐらせる神社が各所にある。奈良の大神（おおみわ）神社ではオンバラ祭とよぶ。オハライの意味であり、茅の輪をくぐることが祓えとされた。岡山市の海吉では、二十センチほどの小さい茅の輪を一年中、軒先につるしておく風習がある。[24]また茅の輪をくぐる時に「みな月の夏越のはらへする人はちとせの命のぶといふなり[25]」と、長命延寿につながるとされた。「群馬県邑楽郡板倉町の雷電神社では、人々のくぐったあと、この茅の輪を解いて、利根川の本流に流す。その茅の輪[26]は蛇と考えられており、頭を先にして流す[27]」とあるように、そのあと川に流してしまって祓えは完了する。川に流すことは『続漢書』「礼儀志」にみえる儺の行事と同じである。[28]

「これらナゴシの行事も先祖祭を前提として解されており、正月に対しては大晦日の大祓え、七月に対しては六月末の水無月祓え、六月祓えがあって、かつては暦制が一年を二分していた証左とされているようだが、まだ未解決の点が多い[29]」。

図12　茅の輪くぐり。鹿児島県、ナゴッサァ（夏越祭）、旧暦六月晦日に神社の神輿を海に運び、浜辺で茅の輪をくぐる。佐々木哲哉ほか、『九州の民間信仰』、明玄書房、337〜8頁。

図13　大津神社（大阪、羽曳野）の茅の輪くぐり。（羽曳野市役所「羽曳野の文化遺産」）

『呂氏春秋』には、巻三季春紀、巻八仲秋紀、巻十二季冬紀にそれぞれ「儺」が、行われたことが記されている。季冬のものは大儺とよばれており、日本の追儺（いわゆる節分）の儀式に相当する。『呂氏春秋』には夏は記されない。夏の場合は端午・夏至の儀式と重なり合うことが多い。夏越の茅の輪くぐりは六月の晦日（夏のおわり）におこなわれ、大晦日（冬のおわり）に行われる追儺と対照をなしている。『呂氏春秋』などの記述をみれば、中国では本来、四季の変わり目ごとに儺を行っていたようだが、「茅の輪くぐり」に相当する儀式はないように思われる。しかし、現代中国においても茅草を編んだ「草環」を壁にかけるという習慣がのこされており、駆邪の効果があるとされている[30]。

なお祇園祭で配られる飾りチマキもまた蘇民将来の故事と重ねて語られる。このチマキは門にかざる。これは先にみた小さい茅の輪を一年中、軒先につるしておく岡山の風習と似る。永尾龍造『支那民俗誌』は「今日でも満洲旗人の家では、正月や其の他の祭事の折には、門の軒に草包といつて日本のしめ縄と同じ形の草の一束を必ずかける習慣があつて、一旦之を掛けると、其の屋敷内は清浄の域になり、其の以後は外部からの穢れ

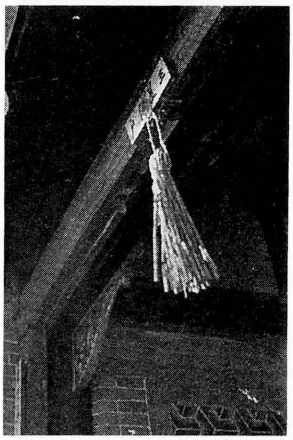


図14　草包。飾りチマキに似る。

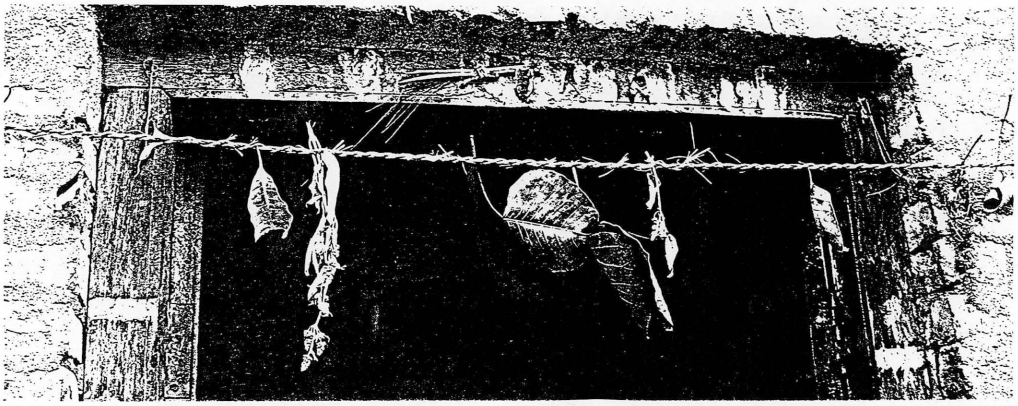


図15　戸口の飾り。マンゴーの葉・花などを、右ないのシメ縄にさして新築の家の戸口に厄除けとしてつるす。萩原秀三郎『雲南』、佼成出版社、140頁より。

を一切入れない習慣があつて、一種の魔除けになつてゐる[31]（図14）」と軒先にぶら下げる「草包」を紹介する。「包む」というからにはチマキのような形状をしていたのかもしれないが、外見上、草が房状にたれさがるのみである。

これらは悪鬼を縛り上げ、虎に食わせてしまうという『山海経』の葦茭にもつながるものであろう。

形状はさまざまだが、シメナワやチマキ、茅の輪くぐりは、悪鬼を縛り上げ、包んで封じこめ、あるいは食らい、また邪気をそぎおとしたりする効果を期待しているようだ。

茅の輪はチガヤとされているが、実際はススキを用いているように思われる。ススキの葉は刃物のように切れるが、その輪をくぐることによって体についている悪霊を切り、あるいは縛りあげたのではないかと思われる。

五、薬物としての茅

『神農本草』には中薬に茅根が記され、虚弱体質を改善する薬物とされている。『本草綱目』にはかなり詳細に記される。

まず名称と区別について「〔時珍〕曰く、白茅は、葉、矛の如し。故に之れを茅と謂う……夏に花さく者は茅と為し、秋に花さく者は菅と為す（『本草綱目』白茅……）」とされる。李時珍によれば葉が矛のようだから「茅」という。これは菖蒲が剣の形とされることと同様である。

また、

〔時珍〕曰く、茅に白茅、菅茅、黄茅、香茅、芭茅の数種有り。葉皆な相似たり。白茅短小、三四月、白花を開き穂を成す。細実を結ぶ。其の根、甚だ長し。白軟、筋の如くにして節有り。味甘し。俗、糸茅と呼ぶ。以て苫蓋及び祭祀、苞苴の用に供す可し。本経に用うる所の茅根、是れなり。…香茅、一名、菁茅。一名、琼茅、湖南及び江淮の間に生ず。葉に三脊有り。其の気、香芬、以て包み藉き及び酒を縮（した）む可し。禹貢の所謂、荆州、苞匭、菁茅、是れなり。

芭茅叢生し、葉大なること蒲の如し。長さ六七尺、二種有り、即ち芒なり。

茅には数種有る。白茅は屋根を葺いたり、祭祀でものを包むのに用いる。香茅は香りがよいため、包む、敷く、酒を縮む、つまり酒を濾すのに用いる。芭茅は葉が大きく、長さ六、七尺（明代の一尺は、三一・一㎝）になる。その一種は芒のことである。これらを考えると茅と呼ばれるものに数種あり、用途によって使い分けされていたように思われる。『本草綱目』の分類では、ススキも茅の一種であり、そのため、茅をチガヤ・カヤと訓ずるようだ。

また『本草綱目』は「屋上敗茅」と、屋根の上の腐敗した茅の薬用について記す。

……屋の四角の茅、鼻洪を主る。〔附方〕……卒中五尸。其の状、腹痛脹急、気息を得ず。上は心胸を衝き、旁、両脇を攻む。或いは磈礧湧起し、或いは腰脊を牽引す。此れ乃ち身中の尸鬼接引して害を為す。屋上の四角の茅を取り、銅器中に入れ、三赤布を以て腹を覆い、器を布の上に着け、茅を焼きて熱からしめ、痛みに随いて追い逐し、跖下痒ければ即ち瘥ゆるなり（『肘後方』）。

体内の尸鬼がひきおこす病を屋根をふいた茅のボロボロになったものを使用して治す。銅器のなかに入れ、茅を焼いて熱くして、布の上から、温灸のようにあてる。一種の呪術的療法である。

芒

〔時珍〕曰く、芒に二種有り、皆な叢生す、葉皆な茅の如くにして大、長さ四五尺、甚だ快利、人を傷つくること鋒刃の如し……。〔敗芒箔〕……鬼気、疰痛、癥結を去る。酒もて煮、之れを服す。亦た焼きて末にし、酒もて下す。彌いよ久しく煙を着くること佳し（蔵器）。（『本草綱目』芒）

芒は鋒の刃のように、よく切れ、人を傷つける。「敗芒箔（腐敗した芒の茎の表皮）」を飲めば、鬼気、疰痛といった鬼のおこす病を治すとされる。また煙でいぶすこと（蚊遣りの原理）も有効であったようだ。

ここには屋根をふくことはしるされていない。

中国では体内に鬼（悪霊）が侵入して病が引き起こされると考えられていた。茅や芒のように悪霊を祓う植物は体内の悪霊に対しても用いられている。

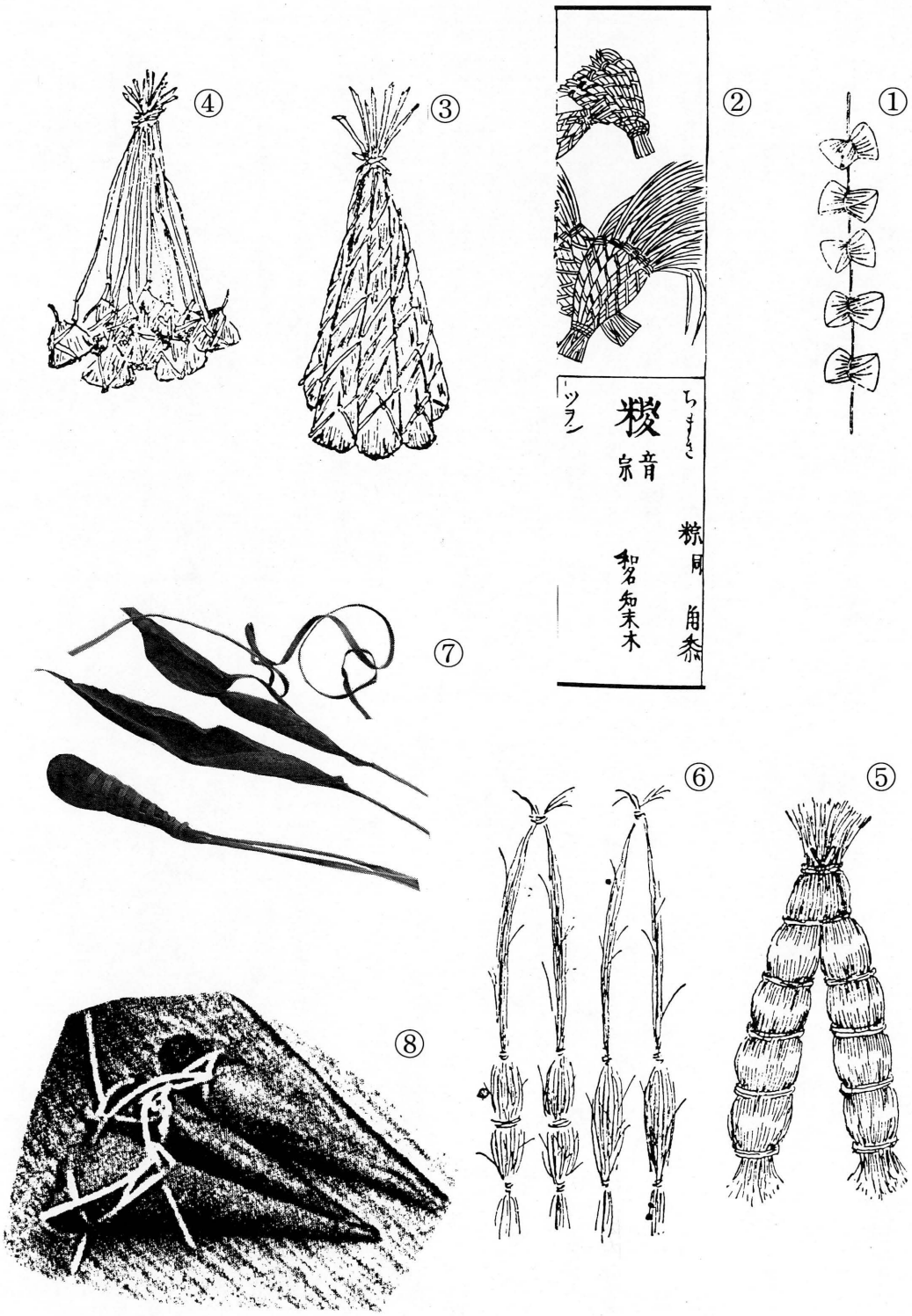
六、粽子

『荆楚歳時記』[32]に、

夏至節の日、糉を食らう。

という。

夏至は昼がもっとも長くなる時で、この日を境にして昼が短くなる。元来、太陽信仰と関連するのだろう。『礼記』月令に


①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
粽
音宗
ちまき
ツヲン
粽同 角黍
和名抄末木

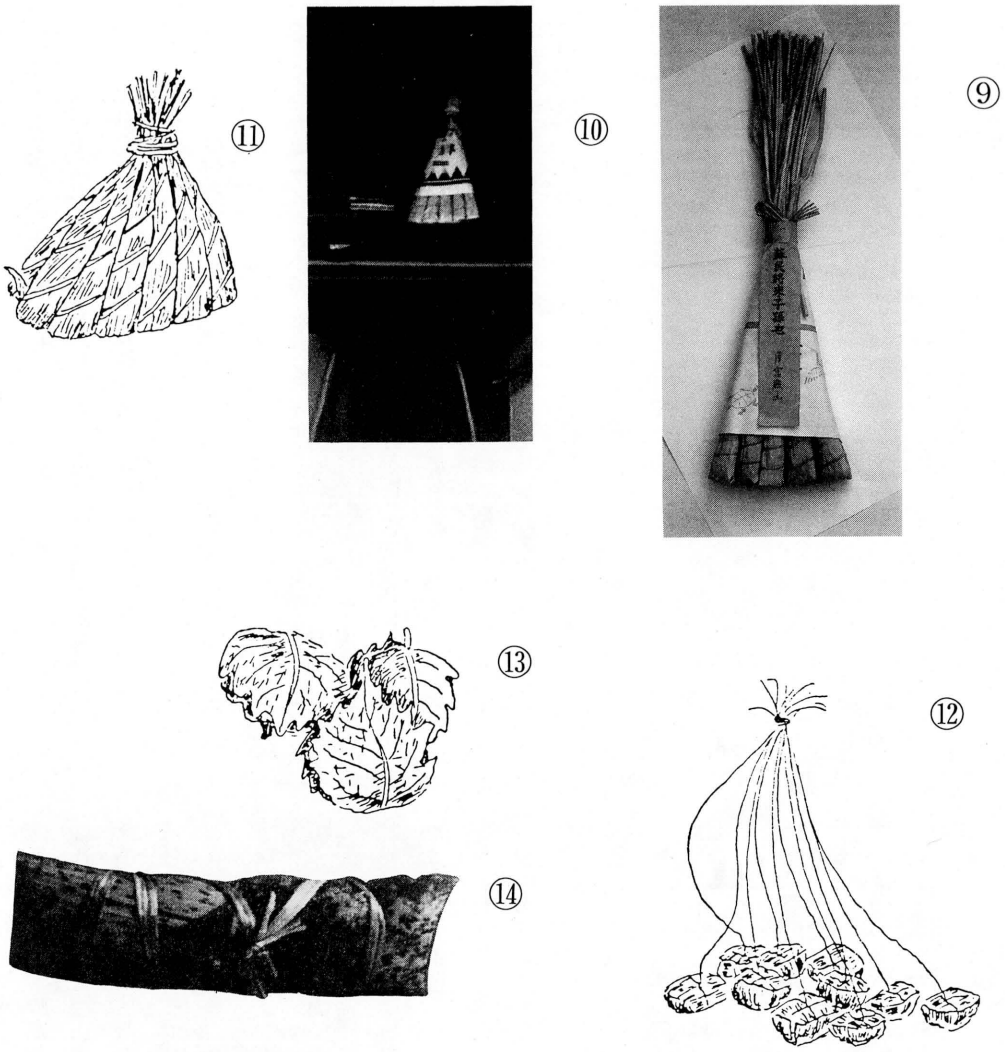


図16　いろいろなチマキ。チマキは竹筒に米⇨角黍（黍を角の形に菰でまいたもの）⇨もち米のチマキへと変遷。形も種々に変化するが角黍・菱角のように、尖った形が悪霊を避けると考えられたようだ。巻いたり包んだりすることは、悪霊が中に入らないため、あるいは悪霊を中に封じ込めるという意味をもつ。それを食べてしまうことは悪霊を完全に消滅させることになる。

①清代の粽（『清俗紀聞』）（平凡社、世界大百科事典20、1972年、175頁）
②ちまき（寺島良安『和漢三才図会』）
③④鳥取のちまき（民俗学研究所『年中行事図説』、岩崎書店、1953年、146頁）
⑤長崎のちまき（同上）
⑥長野のちまき（同上）
⑦三重のちまき（市販のもの。砂糖・米粉・小麦粉・澱粉・酵素・天然笹葉、筆者撮影）
⑧西双版納、タイ族のチマキ（萩原秀三郎『雲南』、佼成出版社、1983年）
⑨滋賀の飾りチマキ（1997年、筆者撮影）
⑩京都の飾りチマキ（1996年、筆者撮影）
⑪長野の笹まき（前掲『年中行事図説』）
⑫新潟の笹まき（同上）
⑬東京の柏餅　（同上）
⑭宮崎のあくまき（『九州の衣と食』、明玄書房、1974年）

は「陰陽争い死生分かる」と陰陽の語で表現される。

また周処の『風土記』には、

謂いて角黍と為す。人、並びに新竹を以て筒糉を為る。楝の葉を（頭に）[33]挿し、五綵を臂に繫く。謂いて長命縷と為す。

ここでは竹筒に入れる。チマキのもっとも初期の形態であろう。ここは楝（オウチ・センダン）の葉を、人の頭に挿すとするのか、竹筒に挿すのかで解釈が異なる。楝を頭に挿すことは『荆楚歳時記』佚文[34]に「楝の葉を頭に挿す」とみえる。しかし、呉均『続斉諧記[35]』はつぎのようにいう。汨羅に身を投じて自殺した屈原を祭るために、「竹筒に米を貯え、水に投じ之れを祭る」ことをしていた。あるとき屈原の霊があらわれ、蛟龍に盗まれるので「練（楝？）樹の葉を以て其の上を塞ぎ、五綵糸を以て之れを約さば、此の二物、蛟龍の憚る所なり」と述べた。そのため「今人、五日に糉子を作り、五色の糸及び楝の葉を帯ぶ」とされる。

米は糈として、『楚辞』「離騒[36]」や『山海経』南山経[37]にみえる。神を祭るのに用いられ、精米だとされる。米は現在でも道教の儀式に使用されており、『楚辞』や『山海経』にみえるものも生米であろう。

『続斉諧記』の記述も、屈原の霊に供えるため、生米を竹筒に入れ[38]て川に沈めたところ、竹筒に封をしていなかったので、米がこぼれてしまい、蛟龍に横取りされてしまう。それをふせぐためにに楝の葉で蓋をし、さらに蓋が取れないように五色の糸で縛りあげた、と解される[39]。

『斉民要術[40]』糉糧法第八十三にひく、『風土記[41]』の注は「俗、此の二節に先んずること一日[42]、菰（まこも）の葉を以て黍米（しょまい）を裹（つつ）み淳濃の灰汁を以て之れを煮、爛熟せしめ、五月五日、夏至に於て之れを啖（くら）う。黏黍一名、糉、一に曰く、角黍と。蓋し陰陽尚お相い裹み未だ分散せざるの時の象に取るなり」という。

ここで興味深いのは、竹筒ではなく、菰の葉で包むこと。糯（もちごめ）ではなく黍（もちきび）を使っていること。なお黍米の「米」は「殼をとった実」をあらわすことばで、日本でいう「稲の米」のことではない。黍は「穀の美なるもの（『管子』軽重己）」とされ、冬至の日に作られた黍糕（きびだんご）は、北方の神と祖先神にささげられた[43]。

後世も、チマキを「角黍」とよぶが、これは本来、糯ではなく黍を使っていたことの名残であろう。

灰汁（あく）で煮ることは、九州のアクマキなどにもみられる料理法である。アクにはアルカリ分が含まれており、生糯を浸けると軟質になる。一週間くらいは保存できるという[44]。

チマキは五月五日（端午）または夏至に食す。端午と夏至の行事は夏の行事ということで混同されることが多い。

糉という文字の右側は「凶懼の人が疾走しているさまとされ、凶の部分が鬼頭の形になっている字形もある[45]」とされる。本来、凶悪な鬼神と関連する文字である。なお「粽」は「糉」の俗字。音通であろう。

「角黍」は角の形である。『本草綱目』では「煮て尖角と成し、椶（棕）櫚の葉心の形の如くす。故に椶と曰い、角黍と曰う」とされる。椶は木偏で椶は米偏だが、その意味は共通するという考え方である。椶（棕）櫚の葉心の形はとんがっており角の形に似るために角黍とよぶという。椶（粽子）は先端が尖っていることに意味があるとされている。

悪霊との関係で推測するならば、角は武器であり、悪霊をおどすためのものではないかと思われる。柳田国男は、神が薄の葉で眼を突いたので粽をつくらないという美濃の例を紹介する。[46] ここは神ではあるが、尖端で眼を突くという話である。この話によれば薄の葉で粽を包むことになるが、粽に薄の葉を用いる例は他にはみえないようだ。

後世、各面が正三角形にちかい四角錐の形のものが多くなる。日本では「多く三角形につくられるのは、みたまとの関係を示すようである」[47] とされるが、その理由は示されない。なお中国でも角形だけでなく、さまざまな形の物がつくられる。三角形のものは最も普遍的である。

「モチゴメや葛粉などでつくり、笹や茅などの葉で巻いたダンゴの一種。茅の葉で巻くのでチマキといい、それに対して笹の葉で巻くをササマキという。そのような区別なくマキという名でもよんでいる」。[48] この記述は要するに「まく」ことに意味があるのではと推測させる。

また「糯米や葛粉などを、熊笹・菖蒲・茅・竹などの葉で包み、その上を糸・藁・菅などで巻き、蒸したり煮たりしてつくった食物」[49] とされる。菖蒲は端午に使われるよく知られた魔除けの植物であり、これを使うのは興味深い。

現代の中国のものは、笹、ハス、アシの葉がつかわれている。[50]

また「団子粽のなかには、その年にできた蓬を必ず入れなければならないと、思っているところがある」[51] とあり、蓬を中にいれるところもある。蓬もまた魔除けに使われることが多い。

なお「長崎県の五島では、盆の一五日に、カラマクラといって、柏の葉で包んだ団子二つずつを結びあわせたものを精霊様に供えている。また沖縄では鬼餅という一種の粽を、一二月八日に食べている。……粽という変った形の食物は、もともと先祖のミタマ祭と関係のある食物であったように思われる」[52] と祖先祭との関連が指摘されている。もし祖先にささげる物であるならば、それをつつんだり、まいたりすることは、悪霊によこどりされないように、という意味をもつのであろう。チマキや柏餅は葉の香りがするが、香りによって悪霊よけをすることもある。

「椶は龍の形に巻いた。……ちまきの形が蛇に似ているところから、これを食べると毒虫の難を避け、また毒虫を殺すこともできるといった。……安倍晴明は、ちまきは悪鬼をかたどったものであるから、これをねぢ切って食べれば鬼神を降伏させることになると説明している」。[53] 毒虫の「虫」は本来、蛇の形をあらわし、悪鬼は蛇の姿をとることも多かった。[54]

同様の考えは『改正月令博物筌』五月、柏餅の項の「粽は蛇の形に表す。これを食すれば彼を降伏する心にて、夏の中わざわひなき事を表して、祝すなるべし」[55]にもみえる。

茭草で包むのは『続漢書』「礼儀志」の儺の注に似る。そこでは神荼が悪鬼を縛りあげるシメナワとして葦茭を使用していた。

「五月は不祥月であると人々が忌み、邪気を払うのに薬草を五色のちまきで飾って薬玉と称するようになった。今日の祝物の薬玉の起源もここにある」[56]。ここにも邪気ばらいとしての「ちまき」がみえる。なお邪鬼と邪気は鬼が本来、死者の霊魂であるという点で通じあう[57]。

『本草綱目』にも「五月五日、糜尖を取り、截瘧薬に和えれば良し」と薬効が記されるが、その効用はチマキが角の形に尖っていることにあるらしい。チマキの角が尖っていることは「粽を角のごとくし、又錐のごとくし、又菱角のごとくし……」[58]とみえる。なお瘧も瘧鬼という悪霊が起こすものとされており[59]、截瘧薬という名称は「瘧をひきおこす悪鬼を截る薬」ということである。チマキはわざわざ角の形にしているようである。後世、チマキの種類が分化していくときも、その意識は確実に受け継がれていく。錐の尖端や菱の実の尖った形に模すのは、それで悪鬼を突くのだろう。それはヒイラギの葉のギザギザが悪鬼を退けるのと同様の発想だと思われる。

巻くこと

「盛岡・金沢や京都府北部などでちまきは〈まき〉とよばれ、愛知県知多郡では〈よしまき〉という。山口県萩では端午の節句のちまきを〈ささまき〉とよんでいる。ちまきは、千巻である。多くまくというところからこの名ができた」[60]。ここではなぜ「多く巻く」のかという説明はないが、前述のように悪鬼をその中に閉じ込めて食べてしまうのであれば説明がつく。

チマキは茅で巻くという漢字があてられる。しかし、中国で本来、チガヤが使われていたという例はさがしだせなかった。日本においても諸書に茅を使ったと記されている。しかし実際に使用されたかどうかは不明である。チガヤの葉は南方には大きなものがある。しかし、一般のチガヤはチマキを巻くには少し小さいように思われる。巻く葉としては、中国ではもと菰の葉で、現在では笹、ハス、アシの葉などをつかう。日本では熊笹・菖蒲・竹などといわれている。

巻くものとしては、藺（燈心草）が使用されている[61]。

矛の形

「茅」という漢字の語源は矛の形だとされる。これは茅の葉の形状とされるが、芽吹いた時の形とも考えられる[62]。「角黍」の形も矛先にみえる。中国で「茅」が魔除けに使われた理由には、茅のこういった形状が関わっているのだろう。ヒイラギや茨などトゲのあるものやススキのように手の切れるものが魔除けに

使われることと同様に、尖ったものであるチガヤも悪霊を祓うのに使用されたのだろう。茅巻きの名称は、矛先であるチガヤの形にまくというところに求められるかもしれない。

矛を茅で巻いたという話がある。『日本書紀』巻第一は「……天鈿女命、則ち手に茅纏の矟を持ち、天石窟戸の前に立たして巧に俳優す」[63]と「茅纏の矟」の話をしるす。これは「茅を以て纏きし矛なり」[64]と解釈されている。茅でまくことによって矛にさらに呪力が益すようだ。

チマキに巻かれたキビは神に供えられるものである。それを悪霊に横取りされないために魔除けの植物で巻く。こういったお供えは御下がりを人が食べることになる。

またチマキ自体をヘビなどの悪霊に見立てた場合は、それを縛り上げて食べてしまうという意味となる。食べることによって悪霊を退治するという考えは、『続漢書』「礼儀志」大儺・『千金翼方』禁経、日本の『地獄草紙』辟邪絵巻などにみえ、普遍的なものである。

チマキは西米良村でも食されている。[65] チマキに関してはチガヤとは直接、結びつかないもののチガヤのもつ呪的な威力の影響を微妙に受けているといえる。

おわりに

チガヤはどこにでもある植物である。現在はほとんど利用されていないが、古代ではさまざまなことに利用された。古代の人々はこの世界は人と鬼（死者の霊）から成り立っていると考えていた。人々がもっとも恐れたのは悪鬼から危害を加えられることであった。悪鬼の害悪を禦ぐために、さまざまな辟邪（魔除け）の方法が考え出された。チガヤもまた典型的な魔除けの植物である。矛の形というところから、屋根、壁、敷物、食べ物を包むこと等にもちいて悪霊の侵入をふせぐ。悪霊を包み込んで封じ込める等々、さまざまな用い方がある。実用の面からいえば、後世、チガヤに代わりうるものが数多くあらわれてくる。しかし儀式や祭礼など神事にかかわる部分では改変をこうむることが比較的少なく、チガヤは古来よりかわらずに使用されつづけている。これは「茅は霊草を謂う」[66]・「霊茅」とあるように、茅に不思議な力を認めていたからである。儒教の学者は節倹のために用いると儒教的理念によって解釈するが、本来、辟邪のためであろう。

日本には中国からさまざまな食物が入ってきている。それにともなって食習慣や宗教的儀式も移入されているようだ。日本語と中国語は言語体系が異なるが、日本人は漢字をそのまま利用し、古代中国語も漢文として解釈し、その知識は血肉化されている。

日本と中国の植物相はよく似ている。「照葉樹林帯とよばれるものはヒマラヤから中国西南部の少数民族の居住地域をへて中国の中南部を通過して日本へと及んでいる」[67]。

茅がチガヤなのかススキなのかといった植物の名称の解釈に

は、中国・日本ともに多少の振幅があり、ズレがある。しかし日本と中国（西南の少数民族の居住地域もふくめて）は基本的に類似の植物相をもち、よく似た食習慣の上にたっている。チガヤをめぐる習俗もそういった文化の共通性の上にあるものとしてとらえられる。

注

（1）小川環樹・西田太一郎・赤塚忠編、角川書店、一九六八年。
（2）諸橋轍次編、大修館書店、一九六〇年。
（3）増淵法之、東方書店、一九八八年。
（4）牧野富太郎、北隆館、一九八二年、六六五頁、ススキ属。
（5）山田卓三『野草大百科』、北隆館、一九九二年、三六一頁、ススキ、芒。
（6）平凡社「世界大百科事典」3、深津正著〈かや〉。
（7）（6）に同じ。
（8）高橋秀男『野草大図鑑』、北隆館、一九九〇年、五六四頁、ススキ（カヤ）。
（9）前掲『野草大百科』、三六〇頁、チガヤ、白茅。
（10）椎葉クニ子、葦書房、一九九五年、三一頁。
（11）白川静『字統』、平凡社、一九八四年、土、社、参照。
（12）『新発現中国科学史資料の研究　訳注篇』京都大学人文科学研究所、一九八五年、赤堀昭訳注部分。
（13）工藤元男「睡虎地秦簡『日書』に現れた治病・鬼神関係資料をめぐって」、第二回張家山医書研究会配布資料、一九九三年一一月一四日　於京大会館、参照。
（14）骨とそれによりつく霊魂に関しては、拙論「尸解仙と古代の葬制のかかわりについて」「中国研究集刊」昃号、大阪大学中国学会編、一九九三年、参照。
（15）唐、尹知章の注に「元篇亡す。今、司馬遷の封禅書に載する所の管子の言を以て之れを補す」とみえる。
（16）南陽文物研究所編、『南陽漢代画像磚』、文物出版社、一九九〇年。
（17）中国で出土している人形は一括して俑とされている。ほとんどが木俑で、桃の木でつくったものもある（長沙馬王堆一号漢墓）。桃は悪霊ばらいとして著名なものである。草俑の出土例もある。これは「蒲草を束ねて体と四肢を作る。長さ約三九㎝」（金子裕之「中国における人形の出土例」一覧表、一九九三年）とされている。この草俑は新疆トルファン・アスタナ三〇二墓（A・D六五三年）（「文物」一九六〇年六月）出土のもの。おそらく端午にもちいる蒲人であろう。『荆楚歳時記』に「楚人、午の日、蒲人・艾人を門に懸け、以て毒気を禳う。陳章に艾人賦有り」とされる。ここの蒲は菖蒲とされる。トルファンあたりで菖蒲が産出したかどうかは不明である。もし中国の別の地域で作られたものが用いられたとすれば興味深い。なお菖蒲で蒲剣も作られた。葉の先が尖っていることで魔除けとされたのだろう。艾人は、よもぎである。菖蒲・艾は日本でも端午の節句に使われる。
（18）『列仙伝』は前漢、劉向撰と記されるが、現在では後漢頃の

作と推定されている。平木康平・大形徹『列仙伝』、角川書店、鑑賞中国の古典、一九八八年、一五一頁参照。

(19) 讃の作者は晋、郭元祖と推定される。前掲『列仙伝』一五二～一五三頁。

(20) 『大漢和辞典』では、ひめじょおん・やなぎばひめぎく・よもぎの一。

(21) 椎葉クニ子『おばあさんの植物図鑑』葦書房、一九九五年。

(22) 艾もまた悪霊除けとされる。注（17）の艾人参照。アイヌの民俗にもヨモギの人形があり、悪霊除けの呪術に使われていたようだ。「ヨモギの茎を束ねて頭、胴、手足をつくり、足に柳の棒を挿して心にしている。そして手には槍、腰には太刀をはかせて削花をつけている。この神はとても丁重に扱われていて…（近藤米吉編著、『続植物と神話』、雪華社、一九七四年、二六二頁）」。

(23) 佐々木哲哉ほか『九州の民間信仰』、明玄書房、一九七三年、三三七頁、ナゴッサア。

(24) 大間知篤三ほか編『民俗の事典』、光明社、一九七二年、二七四～二七五頁。

(25) 同二五五頁。

(26) 蛇は霊的なものと考えられていたのであろう。拙稿「蛇と悪霊の関係について」『中国出土資料研究』創刊号、出土資料研究会、一九九七年、参照。

(27) 前掲『民俗の事典』二五五頁。

(28) 拙稿「疫鬼について」『人文学論集』第一六集、一九九八年、参照。

(29) 大塚民俗学会『日本民俗事典』、弘文堂、一九七二年、五一八頁、なごし。

(30) 大阪府立大学、経済学部一年生、蔡暁曄さんより聞いた話。

(31) 支那民俗刊行会、一九四〇年、巻一、四〇〇頁。

(32) 梁、宗懍撰。『叢書集成新編』所収、『宝顔堂訂正荆楚歳時記』による。なお守屋美都雄訳注、布目潮渢補訂『荆楚歳時記』平凡社東洋文庫、一九七八年、を参照した。

(33) 前掲、宝顔堂訂正本では「頭」の文字がない。東洋文庫本によって補った。

(34) 前掲、東洋文庫一六四頁に紹介。

(35) 『太平御覧』巻三一所引。

(36) 懐椒糈而要之［注］、糈、精米、所以享神。

(37) 凡鵲山之首、糈用稌米。

(38) 後世、竹筒に米を入れて、煮たり蒸したりすることはあったとおもわれる。筆者が一九八四年に西双版納を訪れた時、少数民族（タイ族）の食事として、竹筒に入れて蒸されたモチゴメを食べたことがある。

(39) 楝の葉は頭に挿すこともあり、五色の糸は臂にかけたりすることも多いが、この場合はこのように解釈すべきだろう。

(40) 後魏、賈思勰著。

(41) 『風土記』は晋の周処撰で、ここは『風土記』注とされるが、『太平御覧』の引用文では注の文字が無く、『風土記』の正文だとされる。

(42) 原文は「俗先以二節一日」。このままでは読み下せない。繆啓愉校釈『斉民要術』は「俗先此二節一日」の誤りではないか

とする。隋、杜台卿『玉燭宝典』も「先此二節一日」につくるため、しばらくその解釈に従う。

(43) 漢、崔寔撰『四民月令』に「冬至之日、薦黍糕、先薦元冥、以及祖禰」。

(44) 檜垣元吉ほか『九州の衣と食』、明玄書房、一九七四年、宮崎県、六、地方特有の食物、(1)あくまき、三二五頁参照。ほかにたとえば濁り酒を清ませるなど、不純物を吸着させてとりのぞくためにも灰汁はよく用いられる。

(45) 白川静『字統』、平凡社、一九八四年、五三九頁、燮参照。

(46) 『日本の伝説』「片目の魚」新潮社、一九七七年、六六頁に「美濃の太田では、氏神の加茂県主神社の神様がお嫌いになるといって、五月の節句にも、もとは粽を作りませんでした。大昔、加茂様が馬に乗って、戦いに行かれた時に、馬から落ちて薄の葉で眼をお突きなされた。それ故に氏子はその葉を忌んで、用いないのだといっておりました。(郷土研究四編。岐阜県加茂郡太田町)」。

(47) 前掲『民俗の事典』一二〇頁、粽。

(48) (23)に同じ。

(49) 民俗学研究所『年中行事図説』、岩崎書店、一九五三年、一四六頁。

(50) 田中静一ほか編『中国食物事典』、柴田書店、一九九一年、五七一頁。

(51) (23)に同じ。

(52) (23)に同じ。

(53) 清水桂一編『たべもの語源辞典』、東京堂出版、一四三頁。

(54) 前掲拙稿「蛇と悪霊の関係について」参照。

(55) 『古事類苑』歳時部十六、五月五日、柏餅所引。

(56) 前掲『たべもの語源辞典』一四三頁。

(57) 拙稿「二つの病因論—鬼と気をめぐって—」日本経絡学会誌第二三巻第三号、一九九七年、参照。

(58) 『日本歳時記』四、五月、『古事類苑』歳時部十六、五月五日所収。

(59) 拙文「二条大路木簡の呪文」『木簡研究』第一八号、一九九六年、二四六頁、参照。

(60) 前掲『たべもの語源辞典』一四四頁。

(61) 『諸国図会年中行事大成』三下、五月、『古事類苑』歳時部所収。

(62) 大阪府立大学農学部、山口裕文教授の意見。

(63) 黒坂勝美編、『日本書紀』上巻、岩波文庫、一九四三年、五七頁。

(64) 前掲『日本書紀』注四六。

(65) 『西米良村史』、年中行事。

(66) 『漢書』郊祀志上、顔師古注所引張晏。

(67) 上山春平『照葉樹林文化』、中公新書、一九六九年、はしがき参照。

補記、萩原秀三郎『稲と鳥と太陽の道』大修館、一九九六年、がチガヤを稲作との関連で詳細に考察している。拙稿とは観点が異るが、興味深い論考である。

※本稿は一九九六年度日本生命財団研究助成「照葉樹林における伝統的農村のもつ環境保全機能」の研究成果の一部である。